

「介護民俗学」が、介護の世界の

新しい風になるとうれしい



デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員
民俗研究者（介護民俗学）

六車由実さん

聞き手 白井美樹（ライター）



静岡県沼津市にある小規模デイサービス「すまいるほーむ」。ここに管理者および生活相談員として勤める六車由実さんは、かつては大学で民俗学の准教授として教鞭をとっていた。
学問の世界から介護の世界へ……。一般的にみたら異例ともいえる転身だ。その六車さんに、介護現場への熱い思いを語ってもらった。

民俗学者から介護職員に

—そもそも民俗学というジャンルに興味を持つようになったきっかけは？

六車 私は沼津市の新興住宅地の生まれで、伝統的な文化や神社のお祭りなどがまったくない地域で育ちました。そんな私が民俗学に興味を引かれるようになったのは大学時代でした。

折しも、そのころ、日本ではお米の凶作続きで、「平成米騒動」なんて言葉が社会をにぎわせていました。その時にふと思ったのが、「日本人は米

民族といわれるけれど、なぜだろう。本当にそうなのだろうか」ということだったので。

その疑問を解決するために、山間部の村に入ってご老人に話を聞くフィールドワークを始めました。その結果、実際に神に米をささげていた地域もあれば、イモや肉をささげていた地域もありました。そして、決して日本人は米民族とは言い切れないことが分かったのです。ちなみに卒論も「米と日本人」というテーマで書き上げました。

—その後、民俗学の研究を深めるために大学院へ進んで、修士号、博士号を

PROFILE ●むぐるま・ゆみ●

1970年静岡県生れ。沼津市内のデイサービス「すまいるほーむ」の管理者・生活相談員。社会福祉士。介護福祉士。大阪大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。民俗学専攻。2009年から、静岡県東部地区の特別養護老人ホームに介護職員として勤務し、2012年10月から現職。「介護民俗学」を提唱。著書『神、人を喰う』（新曜社）が第25回サントリー学芸賞受賞。『驚きの介護民俗学』（医学書院）が第20回旅の文化奨励賞、第2回日本医学ジャーナリスト協会賞大賞受賞。

取得されたのですね。

六車 研究を続けたのは、多分、自分が育った地域に民俗の伝統と呼べるものがなかったもので、そういうものに出会うと、人一倍「なぜ？」という疑問が湧き上がったからでしょうね。

それから、歴史学であれば文字を読

み込む作業がメインになりますが、民俗学は実際に現地に足を運んで高齢者に話を聞いて、イメージを再現するのが基本です。この作業が、私にはとても面白く思えたのです。

—さらには、六車さんは、東北芸術工科大学の東北文化研究センターの研究員から、同大学の准教授になられました。そうやってキャリアを積み重ねていたところから一転、なぜ介護の仕事に就かれたのでしょうか。

六車 研究員をしていた3年間は、学生と一緒にフィールドワークをして報告書をまとめたり、民俗関係の映画を作ったりして、充実した研究生活を送っていました。当時研究していたのがいけにえのことだったので、それを『神、人を喰う』という本にまとめ上げたところ、2003（平成15）年にサントリー学芸賞を受賞したので



以前は民俗学の准教授だった六車さん

す。

この後、学内外から評価を受けて、いきなり准教授に抜擢され、大学の授業を受け持つようになりました。教員になるとやらなければいけないのはそれだけではありません。実務的な仕事、営業活動、高校への出前授業、講演、学外からの共同研究のオフアーなど、雑多な仕事が多々増えていきました。

評価が高まって多忙になるのはありがたいことでしたが、自分の中ですべての仕事を処理しきれなくなってしまうのです。休みもほとんど取れなくて、体調を崩すこともありました。そこで、辞めてみるのも一つの選択かなと思います、退職し、とりあえず沼津の実家に帰ったのです。

して働き始めました。

—新しい職場では、何か驚きや戸惑いなどはありましたか。

六車 一番驚いたのは、介護現場では、予想もつかない展開があるということですね。

論文や報告書を執筆することを目的とした民俗学のフィールドワークでは、あらかじめテーマが決まっています、村に入ったら、それに沿った聞き書きを行います。まずは地域の郷土史家を訪ね、どこのご老人に聞いたらいいかを教えてもらうのですが、実際訪ねると、寝たきりだったり認知症が始まっていたり、家族から面会を断られるケースもよくありました。

ところが、介護現場ではあらかじめテーマを持っていても、その通りには聞けないのですが、むしろ私の想像を超えた興味深い話を利用者さんたちか

介護の職場は 民俗学の宝庫だった

—ということは、介護の仕事に就こうと決めて、大学を辞めたわけではないのですか。

六車 そうです。実家でのんびりと生活して、次にどんな仕事をしようかと考えていました。その時は、大学に絶対戻らない決心だったわけではありませんが、「すぐに」というのは自分の気持ちとしては無理だったのです。

何か別のことがしたいと思った時に頭に浮かんだのが、フィールドワークでいろいろとお世話になったお年寄りのことでした。そして、間接的にでもいいから、何かお年寄りに恩返しができる仕事がないかという気持ちになったのです。そこで、早速ホームヘルパーの資格を取り、静岡県内の特別養護老人ホーム（以下、特養）で介護職員と

ら伺うことができました。大正1ヶ月生まれの人や明治生まれの人も少なくありませんが、認知症があったり、介護を受ける状況でも、昔の話は鮮明に覚えているのですね。

それが分かったとき、「介護現場は、民俗学の宝庫じゃないか！」と気づきました。まさに私にとつては、目からウロコだったのです。

—そこが、六車さんの提唱されている「介護民俗学」の原点だったわけですね。

六車 はい。私は、多忙な毎日のルーティンワークをこなしながら時間を見つけては、さまざまな利用者の方、子どもたちや青年期についての記憶を聞き書きしていきました。そのエピソードをまとめたのが、2012（平成24）年に出版された『驚きの介護民俗学』という本です。

また、これとともに、利用者さんにお聞きしたものを、存命中に形あるものにまとめるのが、私に課せられた使命ではないかと思い、「思い出の記」というものを本人と家族に渡すようにもしました。民俗学に携わってきた私としては、人々の記憶を保存し継承することが大切だと思つたのです。

小規模の施設で 利用者より身近に

—ところで、特養から、デイサービスの「すまいるほーむ」に職場を移した経緯には、どんなことがあつたのでしょうか。

六車 特養には3年半勤めました。利用者さんたちとたくさん素晴らしい出会いがあり、聞き書きをまとめた本も完成し、それはとてもいい経験になりました。でも、聞き書きを一緒にやろうとする仲間も結局できなかつた

し、それをどうケアに生かしていくかという展開も話し合うことができませんでした。

例えば、食事の話とか嚥下の問題など、利用者さんたちの目の先の具体的なことについては相談ができましたが、「この介護でいいのか」とか、「そもそも介護ってどういうことだろう」といった視点で話せる相手がいなかったのは寂しいことでした。

私は研究者の世界で育ってきたこともあって、1つのことをもっと広い目で見たいと思つていました。そんなときに、「すまいるほーむ」を経営する会社の社長さんに出会つたのです。

—どんな出会いだったのですか。

六車 社長さんが、私の書いた本を読んで興味を持ってくれて、感想を書いた手紙を送ってくれました。そして、会社が実家の近くだったのでお会いし

ような変化がありましたか。

六車 特養のデイサービスの定員は45人でしたが、「すまいるほーむ」の定員は10人なので、利用者さんたちとより密な関係を結べるようになりまし

た。

例えば、特養の場合は、45人をお風呂に入れるとなると、午前と午後の両方を費やして、いくつものお風呂でスタッフが総がかりで入浴させないといけません。すると、まるで作業のようになつてしまいます。一方、「すまいるほーむ」のような小規模デイサービスであれば、小さなお風呂1つなので、利用者さんと1対1の関係が生まれ、普段は話さないような話までしてくれることも多いのです。

—「すまいるほーむ」では、利用者さんたちは、いろいろな行事も楽しんでいるらしいですね。

六車 私たちのところだけでなく、ほとんどの介護施設では、季節ごとの行事を設けていると思いますよ。高齢者



「驚きの介護民俗学」(医学書院、2012年)
六車由美著

たところ、介護現場の経験も長く、広い視野で介護について考えている、とても面白い人でした。

もともと小規模のデイサービスにも関心があつた私は、「すまいるほーむ」で働かないかと誘われた時には、迷わず移ることにしたのです。ちょうど別の展開を考えていた時だったので、タイミングよくお話をいただくことができました。

—特養に勤めていた時と比べて、どの



民家を利用した小規模デイサービス

にとつては、季節を感じるというのは大切なことだから。

でも、多くの場合は、職員が企画した内容を行っているのではないのでしょうか。その点に私は以前から違和感を持っていました。

利用者さんたちは、私たち職員の倍以上の年月を生きていているので、たくさんの経験をしています。そこで、行事は、利用者さんたちに何かを教えてもらえる機会になればと思つていました。「すまいるほーむ」は、だんだ



「すまいるほーむ」の経営者、村松誠さんと



耳の遠い利用者さんとの会話には紙筒が便利

んそういうふうに変わってきているように思います。

—具体的にどのようにならなってきたのでしょうか。

車さんが考えていることは何かありませんか。

六車 来年度、介護保険制度が改正されますが、これによって市町村ごとに費用の掛け方が変わってくると思います



楽しかった行事のビデオを鑑賞

六車 実は、一年前の春に、ある認知症の利用者さんの入浴介助をしていました。いろいろ話をしているうちに、その人は、以前は踊りの師匠さんをしてきたことが分かったのです。そういわれてみれば、ちよつとした手の動きやしぐさが色つばいのです。

そこで、私は、「ひな祭りの行事の時に、みんなで踊れる踊りを考えてきてくれないか」とお願いしてみました。すると、一生懸命考えてきて教えてくださいました。当日はみんなで踊って、家族の方たちにも見ていただいたのです。それ以降、行事ごとに踊りを教えてもらうようになりました。

また、利用者さんたちの子どもころや子育て中の時の思い出の料理を再現しようという企画も、最近は盛り上がってきていますね。利用者さん同士で「今度は何作る？」と話が弾んでいます。私たち職員は料理が得意ではないので、作るときには、細かいところ

す。ある時、このテーマを取り上げたテレビ番組を見ていて、私はちよつと憤りを感じずにはいられませんです。

ある市の取り組みが紹介されており、元気なお年寄りがボランティアで体操教室などを開いて、要支援の人を助けていくということがクローズアップされていました。その取り組みに対する番組のコメントが、「こうすれば、元気なお年寄りを見て自分も元気になりたいという気持ちが生えて、頑張る介護から卒業できるようになるかもしれませんね」というものだったのです。

これは言い換えれば、介護を受けることはよくないことだと価値付けているようなものです。

—確かに、「介護から卒業」といえば、介護がよくないもののように聞こえますね。

まで利用者さんが指導してくれるのです。

介護は誰もが通る道

—現在の日本の介護現場について、六



ホワイトボードも会話の一手段

六車 さらに言えば、介護を卒業できない人は、努力を怠っているということにもなりかねません。私は、この考え方は怖いなと思うのです。

人はみんな平等に年を取っていきます。誰しも、人生のどこかで必ず人の手を借りないといけない状態になるはずなんです。だから、介護はみんなが通るプロセスだと考えたほうが自然ではないかと思うのです。「今は元気だけど、いずれはお手伝いを受ける側になるんだ。お互いさまなんだ」と思えば、気持ちよく介護が受けられるし、気持ちが豊かになると思いますね。

介護の世界をもっと外に発信したい

—これから六車さんが、「すまいるほむ」で取り組んでいきたいことは何かありますか。

六車 利用者さんたちが向き合ってい



季節にちなんだ作品作りもプログラムの1つ。写真は七夕飾り

るものといえば、老いていく姿、そして老いの先にある死の問題だと思おうのです。「もう生きていても仕方ないよ」などと漏らす人がいたら、介護現場では「そんなことないよ」とか「まだまだ大丈夫だよ」とごまかすしかありませんでした。でも、それでは、ちゃん

と寄り添えていないと思うのです。私もまだ、どうしたらいいのかと思案中ですが、死の問題についても共有できる現場でありたいと思っております。実際、亡くなっていった利用者さんも何人かいるのですが、今取り組んでいるのは、職員だけでなく、みんなで看取っていくことです。利用者さんをお通夜やお葬式に連れて行くのは難しいですが、ご自宅に連れて行ってお別れをしたり、亡くなった人の写真を見ながらしのぶ会を開いたりしています。また、昨年からは、お盆に身内や大切だった人の名前、あるいは戒名を灯籠に書いてもらい、灯籠流しをしたりもしています。

—確かに、そこまで寄り添ってくれるデイサービスは、なかなかありませんよね。

六車 うわべだけでなく、死に向かい

員もみんな将来はここで介護を受けたいと言っていますし、私もそう思っています。

—最後に、提唱されている「介護民俗学」は、今後どのように活用していくつもりですか。

六車 実は、介護民俗学を学問として普及させようなどは、特に考えていないのです。

なぜかという点、介護の世界は、非常に閉ざされた世界で、個人情報の流出や感染症などの心配もあり、外部の人はなかなか入り込めません。普通の世界なら、多様な人が関わることで豊かなものができている。それが本来あるべき社会ではないかと。

そこで、介護民俗学とうたえば、介護の専門家だけでなく、民俗学に携わる研究者も学生も、あるいは小説家など自分の表現手段を持っている人

もどんどん入ってきてくれるようになるのではないかと期待しています。「もつと介護の世界を外に向かって発信していければいい」という一つのメッセージとして、そして方法論として、介護民俗学という言葉を使っているのです。本当に介護の世界が、もつと豊かで楽しいものになればと願っています。



スタッフとこの日の利用者4人と



寄り添える介護を目指す六車さん

合っても、孤独にならずに穏やかに過ごせる、そんな現場でありたいですね。現に、「ここに来てから年を取るのが怖くなくなった」と言ってくれる職員もいて、そういう言葉を聞くと本当にうれしいです。それこそが、本来の介護の在り方だと思っております。実際、職